

X 広報

本章では、平成 22 年 4 月～平成 26 年 3 月の間の広報活動について報告する。

1. 広報誌の発行

(入口 愛)

- 1-1) 概要
- 1-2) 各号の内容
- 1-3) 成果
- 1-4) 今後の課題

2. 授業紹介 PV 制作

(外山敦子)

- 2-1) 概要
- 2-2) 利用方法

3. 取材・問い合わせ

(外山敦子)

- 3-1) 取材協力(学外)
- 3-2) 取材協力(学内)
- 3-3) 学外問い合わせ等

1. 広報誌の発行

1-1) 概要

全学日本語教育部門では、学生の日本語運用力の向上に向けた様々な取り組みを学内外に発信することを目的とした広報誌「^{あつと}@JLー全学日本語教育通信ー」を発行している。本誌は、本部門開設初年度（平成 22 年度）より、原則として年 2 回（3 月、9 月）発行されている。

表 X-1 1号～5号の発行年月および部数等

号数	発行年月	発行部数	配付部数	
			学内	学外
1号	平成 23 年3月	3,000	2,700	200
2号	平成 24 年3月	4,000	3,650	300
3号	平成 24 年9月	4,000	3,650	300
4号	平成 25 年3月	4,000	3,700	190
5号	平成 25 年9月	4,000	3,700	190

体裁は、A4 判両面カラー印刷で 4 ページ（表 X-1 参照）。配付先は、本学教職員（非常勤講師を含む）、日本語リテラシー教育に携わる研究機関および研究者、「日本語表現 T1」「同 T2」受講生のほか、学内各所に常置して自由に持ち帰れるようにしている。



図 X-1 @JL 各号の1面
左上から1・2・3号、左下から4・5号

1-2) 各号の内容

本誌は以下の①～④で構成されている。

① 特集（1～2面）

学生の日本語運用力向上を目指す本部門の取り組みや、開設科目「日本語表現」の特色や学修成果など、本部門が学内外へ発信したい内容について毎号テーマを設けて紹介する。

② ズームズーム（3面）

「日本語表現」全9科目のうち毎号1科目ずつ取り上げ、その授業内容や特色について授業風景の写真を掲載しながら詳しく紹介する。また、科目を担当する教員からのメッセージも併載している。

③ 書く書くしかじか…学生から教職員から（4面）

本学学生ならびに教職員1～2名に寄稿を依頼。テーマは、日本語リテラシー教育に関連する範囲とする。具体的には、学生からは日本語表現科目を受講したの感想、教職員からは、日頃の学生の日本語運用力に関する所感や日本語運用力向上にむけた提言など。

④ インフォメーション（4面）

部門が開催したイベント情報や関連ニュース、受講生の授業外における学修成果などを掲載する。具体的には、日本語関連検定試験の結果、新聞投稿の掲載者紹介、図書館主催〈書評〉大賞の結果、部門主催「授業実践報告会」報告、外部取材の紹介など。

実際の紙面構成は図X-2、各号の記事構成は表X-2のとおりである。



図X-2 @JL5号

左から1・2面「特集：検定で学修の成果を測る」、3面「ズームズーム：日本語表現 C2<スピーキング>」、4面「書く書くしかじか…」、「インフォメーション」



←図X-3 編集会議の様子

図X-4「ズームズーム」取材中→



表 X-2 1号～5号の記事構成

号数	特集	ズームズーム	書く書くしかじか…*	インフォメーション
1号	巻頭言 社会を生きる力としての日本語力(部門長 小倉斉) 「日本語表現」教育課程の概要	日本語表現 T1	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 日本語表現 T1 を受講して(健康医療科学部1年 正木健太/ビジネス学部1年 田中麻美) ▶ 言葉の饒別(メディアプロデュース学部教授 酒井昌代) 	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 各種検定受検結果 ▶ 学内外取材協力
2号	〈座談会〉 協同学修による小論文作成	日本語表現 T2	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 学修の成果として新聞投稿にチャレンジ(文学部1年 水野光理) ▶ 図書館と全学日本語教育部門との連携(図書館長・文学部教授 久保朝孝) 	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 各種検定受検結果
3号	キャンパスライフと日本語運用力 —受講アンケートの結果から—	日本語表現 B2	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 「日本語表現」科目で学んだこと(交流文化学部 浅野芳美) ▶ 大学で日本語を教えるということ(ビジネス学部教授 大塚英揮) 	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 各種検定受検結果 ▶ 新聞投稿文掲載者 ▶ 〈書評〉大賞結果 ▶ 学内外取材協力
4号	TPOに応じた ライティングスキルの育成	—	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 外来の聞き下手、話し下手(健康医療科学部教授・愛知淑徳大学クリニック内科 安藤富士子) 	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 各種検定受検結果 ▶ 新聞投稿文掲載者 ▶ 〈書評〉大賞結果 ▶ 第1回「授業実践報告会」開催報告 ▶ 学内外取材協力
5号	検定で学修の成果を測る	日本語表現 C2	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 採点アシスタント業務に携わって(ビジネス学部4年 神谷妙子) ▶ Poor を自覚して(文学部教授 太田直子) 	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 各種検定受検結果 ▶ 新聞投稿文掲載者 ▶ 〈書評〉大賞結果 ▶ 学内外取材協力

* 「書く書くしかじか…」の執筆者職名・所属・学年は掲載当時のもの。

1-3) 成果

本部門が学生の日本語運用力向上のために取り組んでいる様々な実践や、日本語表現科目の学修内容ならびにその成果を学内外に報告することができた。特に、「日本語表現 T1」・「日本語表現 T2」の学修内容やその手法を、学内教職員ならびに学生に向けて広く発信する貴重な機会になり、シラバスでは伝わりにくい教室の雰囲気や学生の表情なども併せて伝えることができたのは、大きな収穫である。実際に、広報誌で紹介されたのがきっかけで授業科目に興味を持ち、受講を希望するケースも報告されており、宣伝効果の一端があらわれているといえよう。

一方、学外からの反応としては、日本語リテラシー教育に力を入れている大学や教員からの問い合わせがしばしば寄せられるようになった。このように、広報誌の寄贈をきっかけに他大学の情報を入手する機会も増えており、広報誌が他大学との交流にも大きな役割を担っている。

1-4) 今後の課題

既号では、本部門が新設されてまだ日が浅いことから、部門の実施事業の報告に重点を置いてきた。部門の開設から4年が経過し、こうした役割は一定の成果を上げてきたといえよう。

今後は、本学の日本語リテラシー教育を担う全学的組織としての役割を果たすべく、大学の日本語リテラシー教育に係る問題提起、実態調査、様々な提言などを戦略的に発信し、学生の日本語運用力向上を目指す読者に資する情報を提供する紙面構成にシフトしていきたい。また、編集組織そのものも見直しを図り、企画立案や編集に学生を参画させるなど、新たな試みも検討中である。

2. 授業紹介 PV 制作

2-1) 概要

2-1-1) 制作の目的

日本語運用力を涵養するためには、学修の反復と継続が不可欠である。そのため本学の日本語表現科目では、基礎（1年前期）→応用（1年後期）→発展（2～4年）までのカリキュラムを整え、初年次生のみならず上級生にも学修継続を促してきた。特に発展科目はコース別に7科目開講しており開講当初から学生の関心は高かったものの、科目ごとの特徴や違いがシラバスだけでは伝わりにくく、内容についての質問が絶えなかった。そこで、各科目の実際の授業風景を映像で分かりやすく伝え、もって科目選択の一助になるよう企図された。



図X-5 日本語表現授業紹介 PV
(H24.01.13 作成)

2-1-2) 内容

内容は、発展7科目の実際の授業風景と各担当教員からのメッセージで構成した（表X-3）。

実際の撮影および編集には、現代社会学部3年生とメディアプロデュース学部2年生の2名に協力を求め、部門教員の立ち会いのもと

表X-3 撮影された授業内容

科目	担当者	内容
日本語表現 A1	久保朝孝	レポートテーマ 「同性婚は可か否か」〈準備〉
日本語表現 A2	奥村由実	プレゼンテーション 発表と討議
日本語表現 A3	小倉 斉	「速読」一速く効率的に「読む」 技術 I = 話題ストラテジー
日本語表現 B1	桑本いづみ	社外文書の作成練習 案内状・注文状
日本語表現 B2	樋口貴子	ビジネスシーンの実際① 「報告・連絡・相談」
日本語表現 C1	服部左右一	カンタン絵はがき 「もう1人の自分」を発見する
日本語表現 C2	三久保角男	話を聞き出す、報告する2 レポートの技術

と、平成 23 年 12 月～平成 24 年 1 月にかけて各教室での撮影、および編集作業がおこなわれた。各科目 2 分程度、全体で 14 分 30 秒となった。

2-2) 利用方法

学生を対象とした用途は、以下の 2 点である。

- ① 応用科目「日本語表現 T2」（1 年後期開講）の最終週、発展科目の授業内容や履修方法を説明した後に視聴（平成 23 年度後期より実施）。
- ② 年 2 回開催する履修相談会（V「学修支援」参照）で放映（平成 24 年度前期より実施）。

視聴後の学生の感想は、「授業内容が理解できた」、「授業に興味があった」など、PV 視聴を高く評価する声が多い。実際に、平成 23 年度は年間 600 人程度に留まっていた発展科目受講者数が、平成 24 年度以降 1,000 人を超えるようになり、履修者増に大きく貢献した。

同時に、大学広報の一環として、オープンキャンパスの模擬授業や入試説明会の場で利用され、受験生や保護者、高校関係者に向けた広報活動にも一役買っている。

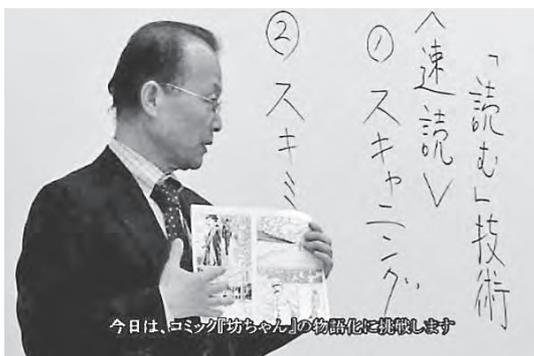


図 X-6 PV 映像より(日本語表現 A3)
授業の内容を画面下のテロップで解説



図 X-7 PV 映像より(日本語表現 B1)
学生が先生に質問している場面

3. 取材・問い合わせ

3-1) 取材協力（学外）

記事の名称	話題の日本語教育を追う—愛知淑徳大学「日本語表現」
掲載誌	朝日新聞
発行年月日	平成 22 年 9 月 25 日
取材協力者	全学日本語教育部門長・文学教授 小倉 齊
概要	平成 22 年度、日本語表現科目が新たな全学必修科目としてスタートした。本科目導入の背景、目的、カリキュラムの全体像などを紹介する。

記事の名称	研究室探訪 38 「他者の視点」で読む—学生の「日本語表現力」をサポート
掲載誌	読売新聞
発行年月日	平成 22 年 11 月 5 日
取材協力者	全学日本語教育部門准教授 外山 敦子
概要	平成 22 年度に全学必修科目として開講した「日本語表現」の指導ポイントは、学生の文章をすぐには添削しないことにある。文章の題材を集めるときも学生同士でアイデアを出し合い、書き上げた文章は学生同士で批評する。自分の文章を「他者の視点」で読めるようにすることを重視している。

記事の名称	日本語教育に力—各大学が相次ぎ取り組み
掲載誌	読売新聞
発行年月日	平成 23 年 4 月 8 日
取材協力者	全学日本語教育部門准教授 外山 敦子
概要	新入生の書く力や読む力を伸ばすため、日本語運用力向上に本格的に取り組む大学が相次いでいる。先進的な取り組みの一例として、大学初年次の必修科目に「日本語表現」科目を導入した本学の取り組みが紹介された。

記事の名称	人間力を磨く「日本語表現」—文章力、会話力を極めてみよう！
掲載誌	高校生新聞（東海 3 県版）197 号（高校生新聞社編） →【参考 3】
発行年月日	平成 24 年 6 月 10 日
取材協力者	全学日本語教育部門准教授 外山 敦子 文学部国文学科 3 年 早川元将 人間情報学部人間情報学科 2 年 天野亜里紗 メディアプロデュース学部メディアプロデュース学科 山田真実
概要	本学の日本語表現科目を実際に受講した学生 3 名が、受講前と受講後の日本語に対する意識の変化、学修する内容、学修成果の実感、カリキュラムの魅力について、座談会形式で語った。

記事の名称	特別レポート 大学におけるリメディアル教育の現状と課題 —愛知淑徳大学のリメディアルサポート体制を追う →【参考 1】
掲載誌	学研・進学情報 2012 年 12 月号（第 45 巻第 13 号）（株式会社学研教育みらい編）
発行年月日	平成 24 年 11 月 1 日
取材協力者	全学日本語教育部門長・高大連携推進委員長・文学部教授 小倉 齊

	文学部英文学科教授 太田直子 文学部英文学科教授 若山真幸 全学日本語教育部門准教授 外山敦子
概要	大学生の学力が低下している原因は何か。それを本学では、能力がないのではなく「考える」経験が不足していたからだと分析している。そのため、論理的思考力を涵養するための表現力育成の場として日本語表現科目を開講し、成果を挙げている。また、入学前指導教材『基礎ワークブック』（英語・日本語）を学研と共同開発し、専願制推薦入試合格者全員に配付するなど、リメディアル教育にも力を入れている。

記事の名称	聞蔵Ⅱ デジタル活用事例のご紹介 日本語の運用スキルを身につけることは日常生活にも役立つ
掲載サイト	朝日新聞デジタル（朝日新聞社編）
公開年月日	平成 25 年 9 月 30 日
取材協力者	全学日本語教育部門准教授 外山敦子
概要	「日本語表現 T2」の学修内容の一つ、「データベースを利用した文献検索」について、指導方法や学生の検索パターンの特徴などを紹介。大学初年次段階で、信頼のおけるデータベースを活用して情報収集ができるようになることの必要性を説明した。

3-2) 取材協力（学内）

記事の名称	特集：全学必修科目スタート—日本語表現科目
掲載誌	楓信 第 68 号（愛知淑徳大学後援会編）
発行年月日	平成 22 年 5 月 14 日
取材協力者	全学日本語教育部門長・文学部教授 小倉斉
概要	平成 22 年度、日本語表現科目が新たな全学必修科目としてスタートした。本科目導入の背景、目的、カリキュラムの全体像などを紹介する。

記事の名称	特集：全学必修科目受講レポート —基幹科目（日本語表現／違いを共に生きる／ライフデザイン）
掲載誌	楓信 第 69 号（愛知淑徳大学講演会編）
発行年月日	平成 22 年 10 月 31 日
取材協力者	文学部国文学科 1 年 鈴木暖乃 心理学部心理学科 1 年 安田篤史 メディアプロデュース学部メディアプロデュース学科 1 年 菅沼夏実
概要	平成 22 年度に新たにスタートした全学必修科目「日本語表現」の受講を終えたばかりの学生 3 名が、授業内容や学修成果を実際の体験に基づき、座談会で語る。

記事の名称	特集 2：新・座談会シリーズⅡ 全学共通履修科目—日本語表現 →【参考 2】
掲載誌	愛知淑徳学園広報誌 第 103 号（学校法人愛知淑徳学園編）
発行年月日	平成 24 年 1 月 31 日
取材協力者	全学日本語教育部門長・文学部教授 小倉斉 全学日本語教育部門准教授 外山敦子 全学日本語教育部門講師 森本俊之 文学部国文学科 2 年 早川元将 人間情報学部人間情報学科 2 年 青山裕紀

	心理学部心理学科1年 廻彩乃 メディアプロデュース学部メディアプロデュース学科1年 小椋愛子
概要	全学共通履修科目「日本語表現」をテーマにした、教員3名と学生4名による座談会。科目新設から2年、学生はこの科目で何を学んだのか、最も印象に残っていることは何か、その後の学修にどう生かしているかなどを語った。

記事の名称	イベントレポート 全学日本語教育部門 授業実践報告会
掲載サイト	愛知淑徳大学受験生応援サイト（愛知淑徳大学アドミッションセンター編）
公開年月日	平成25年10月9日
取材協力者	全学日本語教育部門
概要	平成25年9月3日に、日本語表現科目のさらなる充実をめざした「全学日本語教育部門 授業実践報告会」が開催され、部門教員が授業報告や研究成果の発表などをおこなった。学生の日本語運用力をいかにして伸ばすか、学部学科をこえた教員同士が、活発に意見交換する場となった。

3-3) 学外問い合わせ等

大学名	問い合わせの内容
広島経済大学	1名来学。全学必修化の経緯、カリキュラムの全体像、授業の運営方法などの聞き取り。
湘南短期大学	全学必修化の経緯、カリキュラムの全体像、授業の運営方法などの聞き取り、ならびに授業見学。（※3名来学予定だったが、東日本大震災発生のため視察中止）
愛知東邦大学	1名来学。カリキュラムの全体像、授業の運営方法、テキストの内容、学力不足の学生への対応、学部教育との連携などの聞き取り。
宮城学院女子大学	オリジナルテキストの内容に関する問い合わせ。
成蹊大学	オリジナルテキストの内容に関する問い合わせ。

その他多数の問い合わせあり。

【参考3】高校生新聞（東海3県版）197号 掲載記事

高校生新聞

人間力を磨く「日本語表現」

愛知淑徳大学
最新レポート

文章力、会話力を極めてみよう!

愛知淑徳大学は「日本語表現」を必修科目にして社会生活に欠かせない表現力の向上を目指している。全学必修の「基礎」科目から「応用」、「発展」へと4年生まで体系的に学べるカリキュラムによって、学生たちの文章力、会話力に磨きがかけられている。

日本語表現の授業を受ける前と後で印象は変わりましたか?

早川 最初は大学生になってまで日本語を学ぶ必要があるのかと感じたのですが、実際に受講してみると、自分の日本語能力の低さを痛感する場面が多かったですね。



早川 元将さん
文学部3年

天野 堅苦しくてつまらなそうな授業だと思っていたのですが、みんなで行う作業も多く、結構、楽しくできました。

山田 私は国語や現代文が苦手でした。作文や感想文も、どのように書いてよいのかわからず不安でしたが、基礎から教わり、少しずつ書けるようになりました。1年生の前期では一番楽しい授業でした。

一般的な国語の授業と違ってかなり実践的だそうですね。

早川 例えば、前週に出された課題に従って各自が文章を作成してきます。その作成者を

らされぬまま、別の人が添削します。それを近くの人と交換して、今度は添削の出来栄を見、ということもしました。

天野 自分の文章がほとんど修正されずに戻ってくる。「ちゃんと読んでくれたの?」と思ってしまう。たくさん添削されたほうがうれしいですね。

山田 人の文章を添削していると「ここが違う」というのが分かりますからね。

早川 昔から「ダメ出し」されたほうが、ステップアップにつながると思いますね。

人に何かを伝える力が身についた実感はありますか?

早川 文章の構成力などは、レポートを書くときに役立つと感じています。

山田 最初はレポートの書き方が全く分かりませんでした。が、基礎の基礎から学べたのは良かったです。

天野 「話し言葉」と「書き言葉」の違いが身に付いたと思



天野 亜紗さん
人間情報学部2年

います。書き言葉でものを考えることで、相手に伝わりやすい話し方もできるようになったと思います。

日本語表現は4年生まで選択履修できますよね。

早川 将来的には出版の仕事や新聞記者などを目指していますので、文章能力をさらに高めるべく履修を続けようと思っています。

天野 今「ビジネススピーキング」を受講していますが、就職活動のためにも、適切な話し方を習得したいです。

山田 苦手意識が強かったのですが、やればできることが分かりました。適切な日本語、伝わる日本語をもっと極めたいと思うようになりました。

いわゆる「若者言葉」などが気になることはありますか。

早川 人の言葉は気になりませんが、自分が使うことには抵抗があります。文章を書く仕事を目指すには、言葉の変化にも敏感でありたい。適切な日本語を使いこなすだけでなく、言葉の文化的背景を論じられる人になりたいですね。

天野 テレビで街頭インタビューなどを見ると、乱れた言葉を使っている大人も沢山いますよね。

山田 間違った日本語を使う芸能人を見ることがあります。私はマスコミ関係への就職が目標なので、言葉を大切にしたいという思いがあります。

天野 表現力を養うことで、Fの世代から「格好良い」と思わ

他にこの授業の魅力は?



山田 楓実さん
メディアプロデュース学部2年

山田 例えば、消費税や代理出産などのテーマで同じ年代の人と議論ができました。自分の意見を出し、人の意見を聞くことで「こんな考え方もあるのか」と気付くこともありました。

早川 自分の意見を持つことの大切さを実感するようになりました。

天野 自分ひとりだと思考が偏りがちですが、面白い意見を聞いたりすると「ああ、そこから考えるのか」という発見もありますね。

山田 人の意見を素直に聞くと思うと、自分の間違いを認めざるを得ない。いろいろ勉強になりました。

れる大人になりたいですね。

早川 そういった意味でも日本語表現は、大学生の時にこそ受けるべき授業なのかもしれません。

言葉で自分の思考を表現する。

「日本語表現」の特徴は「基礎」から「応用」「発展」へと、4年生まで体系的に学べるカリキュラム編成にあります。何より継続が物を言いますから、1年生前期の全学必修である基礎科目を学び、応用科目や発展科目の中で繰り返し実践することが重要なのです。就職活動を終えた4年生が、「もう一度、卒業までにきちんと日本語表現を学びたい」として発展科目を履修することも珍しくありません。実践の場に身を置いて、初めて自分には表現力が足りないと感じるからでしょう。



全学日本語教育部門
外山敦子 他教授

言葉を使って表現する、とは自分の思考を整理する。相手に伝える。相手の意図を的確に受け止めることであり、社会生活を送る上で必要不可欠な能力です。基礎科目では「読む」「書く」「話す」「聞く」の中で、書くことを中心に学びます。他者意識を醸成するため、人と話しながら考えをまとめたり、知恵を出し合ったりするグループ学習を多く取り入れています。表現の方法は一通りではない。自分で考えなければ応用が利きません。教員はヒントを出しますが、どうしても相手に伝わるかの答えは自分で導き出させるようサポートに徹しています。

空気を読むことが日本人の美徳であるかのようにはやされていますが、言葉で自分の考えを述べる、相手の表現を受け止めることにも果敢に挑戦してほしい。言葉は、自分と向かい、人間だけと関わるための道具ではなく、むしろ全く異なる人間、異なる境遇の人たちとも対等に関わっていくための重要なツールです。TPOに合わせて言葉を使いこなせば視野も活動範囲も広がります。スキルとしての日本語活用力は当然必要ですが、生きる力につながるような授業を心がけています。

やってみよう! 適切な日本語表現にチャレンジ!

日本語表現には、書き手の意図が明確に伝わるような工夫が必要。友達や先生といっしょに考えてみよう。解答と解説は右の欄外にあるよ。

問題 [1] 次の文を、文法的に適切な文に書き改めなさい。 ——私の健康法は、水泳を大学入学後に始めた。	問題 [2] 次の文を、文法的に適切な文に書き改めなさい。 ——彼は、トランペットもギターも弾ける。
問題 [3] 次の文は、書き手の意図が読み手に伝わりにくい。どのような点に問題があるのかを考え、書き改めなさい。 ——前回の試合のように途中であきらめずに最後まで頑張ろう。	問題 [4] 次の文で、文章が二通り以上にならないように「時々」を挿入する場合、どこが適切ですか。 ——私は ①高専と同層する ②兄夫婦の子どもに ③会いたくて ④実家に帰る。

伝統は、たちどまらない。

愛知淑徳大学

文学部 | 人間情報学部 | 心理学部 | メディアプロデュース学部 | 健康医療科学部 | 福祉教育学部 | 交通文化学部 | ビジネス学部
[アドミッションセンター] 〒464-8671 名古屋市中村区名駅3丁目 TEL.052-781-7084 (直通) http://www.asa.ac.jp/

オープンキャンパス2012

7/28 Sat 7/29 Sun

時間: 10:00~16:00 (無料申込不要)
場所: 長久手・豊が丘キャンパス(説明時間)
内容: 全体説明会、学科(専攻)説明、入試相談、キャンパスツアーなど

7/28-豊が丘キャンパス 7/29-豊が丘キャンパス

「日本語表現科目」履修授業同時開催!

全学日本語教育部門運営委員会

委員長	小倉 齊 (文学部教授)
委員	中野 謙一 (文学部准教授)
	永井 聖剛 (メディアプロデュース学部准教授)
	谷口 純世 (福祉貢献学部准教授)
	大塚 英揮 (ビジネス学部教授)
	外山 敦子 (全学日本語教育部門准教授)
	松井 則子 (国際交流センター事務室長)

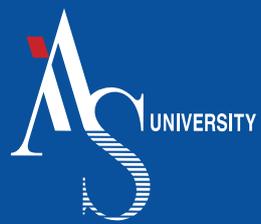
全学日本語教育部門スタッフ

部門長・教授	小倉 齊	
准教授	外山 敦子	
講師	入口 愛	楠井 亜依
	畑 恵里子	深津 周太
	森本 俊之	
事務室長	松井 則子	

ことばをつなぐ、学びにつなぐ

愛知淑徳大学全学日本語教育部門 活動実施報告 2010-2013

発行日	平成 26 年 3 月 31 日
編集者	愛知淑徳大学全学日本語教育部門 nihongo@asu.aasa.ac.jp
発行者	愛知淑徳大学 〒480-1197 愛知県長久手市片平二丁目 9 TEL 0561-62-4111 (代表) FAX 0561-63-9308 (事務室)
印刷所	株式会社クイックス 〒456-0004 愛知県名古屋市熱田区桜田町 19-20 TEL 052-871-9190 FAX 052-889-1410



愛知淑徳大学